

# 介護における「自立」と「自律」概念の分析の試み

## －自律支援にむけて高齢者介護に求められるもの－

ますだ いくたくみこ  
増田いづみ・生田久美子

### 〈要 旨〉

福祉における「自立」についての重要性は倫理的側面を含めて、様々な形で論じられており、その重要性については誰もが認めるものである。しかしながら、その「じりつ」には、同じ読み方でも「自立」と「自律」が存在し、両者の概念の違いについてはこれまで明確な形で議論されてこなかった。そしてそのことが、実践における「じりつ」をめぐる様々な在り様を現出させてきたと言えよう。

そこで本論では、介護の中で用いられる「自立」「自律」という概念に注目し、各々の概念の意味するところを整理するとともに、特に高齢者介護その目指すべきものはなにかということについて、哲学・教育・介護の領域における文献分析を基に考察していく。

### 〈キーワード〉

自律、自立、高齢者介護、哲学、倫理観

## I. はじめに－問題の所在

1995(平成7)年の介護福祉士の倫理綱領<sup>1)</sup>には、すべての人々の基本的人権を擁護し、一人ひとりの住民が心豊かな暮らしと老後が送れるように、利用者本位の立場から自己決定を最大限尊重し、「自立」に向けた介護福祉サービスを提供していくとした利用者本位、自立支援の理念が掲げられている。福祉における「自立」についての重要性は倫理的側面を含めて、様々な形で論じられており、その重要性については誰もが認めるものである。しかしながら、その「じりつ」には、同じ読み方でも「自立」と「自律」が存在している。一般的に、「自立」(Independence)とは、「自分のことは自分でできる」あるいは「自分でできることは自分でする」ことであり、「自律」(Autonomy)とは、「自分のことは自分で決めることができる」という意味で使われることが多い。介護における実践の場では、介護を必要としている人の日常生活の「自立」を目指す援助とともに、その人が主体

的に生活できるように「自律」にむけての支援が同時におこなわれている。介護の中で取り扱われている「自立」は、「自律」「自立」を統合して「自立」としていることが多い。介護を必要としている者の、身体的、精神的、社会的な状態によって、支援のあり方にも個別性が求められる。このことが実践における「じりつ」をめぐる様々な在り様を現出させてきたと言えよう。そして高齢者の介護においては、両者の概念の違いについてはこれまで明確な形で議論されてこなかった。

しかし、障害や疾病、高齢などにより日常生活に支援を必要とする人にとっての「じりつ」は、他者の支援を得ながらはじめて達成されるものという意味を持つ。つまり、何でも一人でできるという意味の「自立」とは異なり、例え障害があったとしても、自分の生活は自分で主体的に決定していくことができるという、その意味で「自律」を基本にしていると言える。このように自立支援には「自律」を含めた広義の支援が含まれていることは、福祉領域においては、特に障害当事者にとっての「自立」を問う議論に多くみられる。

箕岡<sup>2)</sup>は、「介護における自立とは、老化、障害、疾病などによって生活支障を抱えている人が、その生活支障を抱えていることによる心身の不自由を、支援者や社会資源の力を借りながら受け入れ、具体的に生活を組み立てていくプロセスだ」と述べている。特に認知症介護における自立支援とはどうあるべきなのか考える時、自分のことは自分できる「自立」、自分のことは自分で決めることができる「自律」のどちらの支援も重要であることは疑う余地はない。むしろ高齢者介護においては、「自立」と「自律」の双方を区分しての支援は困難であり、すなわち一般的意味での自立支援以上に自律支援が求められると言える。

そもそも「自立」とはどのようなことを言うのか。「自立」には自分一人の力で「自立」に至ることが重要であるとは言え、一生の間それを維持し続けることは不可能であることは言うまでもない。では、介護における「自立」とはどのようなことを言うのか。

そこで本論では、介護の中で用いられる「自立」「自律」という概念に注目し、各々の概念の意味するところを整理するとともに、特に高齢者介護その目指すべきものは何かということについて、哲学・教育・介護の領域における文献分析を基に考察していく。

一人の人生の実現にむけて深く関与していくことが求められる介護では、人間を深く理解するための思考である哲学的、倫理的思考が必要である。そのため、方法としては、哲学・教育・介護の領域における文献分析の方法を取り、各領域で二つの概念がこれまでどのように扱われてきたのかを概観したうえで、高齢者介護に求められる「じりつ」の意味について考察していく。

## Ⅱ. 哲学・教育学的な観点からの「自立」と「自律」概念の考察

### 1. 非従属の「自立」・「自律」概念

そこで、まずは哲学・教育の領域での「自立」と「自律」の概念がどのように捉えられてきたのかに目を向けたい。

河野<sup>3)</sup>は哲学の観点から自立概念を論じ、「自立」と「自律」の違いについて論じている。

#### 1) 非従属的な能動性としての自立

河野は<sup>4)</sup>「自立とは、何でも一人で行えるということではない。自立したかどうかという表現は通常、子どもに対して使う言葉である。大人は子どもに様々な知識や技術を学んで、賢くなってほしいと願い教育する。その目指すところは、幸せになってほしいという願いである」と述べ、「自立」とは何でも一人できることではなく、大人が子どもの幸せを願い養育し、その結果の状態であると捉えている。子どもが自分の養育義務の範囲を離れ、独立し、対等の人格となるにつれて、「自立する」ということは、自発性を有する行為者となり、尊厳をもって扱われるべき独立した人格となる<sup>5)</sup>という意味に変容していくと言うのである。つまり、これは人が誕生し死に至る最期の瞬間まで独立した存在として生きていくことを「自立」とみなすことに他ならない。

では、独立した存在となることとはどのようなことを言うのか。河野は「自立」を独立した人間の存在価値であると捉え、自分たちが住む社会環境の中で他者に従属せずに、自分の欲求と意思を実現させるように自分自身で行動していくこと、つまり「自立」を非従属的な能動性<sup>6)</sup>として定義している。この定義に従えば、「自立」は他者につき従うのではなく、自らの欲求と意思を実現するように行動していく様を表し、一方他者からは何らかの変化もしくは成長として観察できる様態ということになる。

#### 2) 自ら定めた基準で行動する自律

「自立」に関係が深い「自律(autonomy)」について、河野<sup>7)</sup>は、それは自分自身を自分でコントロールすること、つまり自己抑制を含めた自己制御(self-control)、自己運営(self-management)を意味し、それは他者によるコントロール、他律と対立する概念であるとして捉えている。

河野<sup>8)</sup>によれば、「自律」とは自ら定めた基準によって行動することに他ならないと言うのである。

氏は「自分の価値判断とは、「何々のほうがよい」という自分の選好の基準を定め、自分の価値判断に準じるとは、その価値に向かって自己制御と自己管理を行い、自分の判断と行動から生じる帰結を自分に引き受けることである<sup>9)</sup>とし、自らの判断・行動による結果は自分が責を負うことであると言う。つまり、自らの内部には自身が定めた基準があり、その判断基準に従って行動することが「自律」というのである。

### 3) 非従属の自立・自律

さらに河野は、「自立」と「自律」に共通している点は「(それらは)非従属を意味し、自分が何をすべきか、何が自分にとってふさわしいかを、他者から押し付けられない状態」にある<sup>10)</sup>と言う。そして「自立」とは、自分の求めることを実現できるように環境をコントロールできること、「自律」とは、自分の求めるものを実現できるように自己コントロールすることである<sup>11)</sup>と2つの概念の区別を試みている。

しかしながら、認知症により判断・行動が困難になってしまった者にとって「自律」は他者を介して行われるという現実を考えると、介護を必要とする者にとって、環境、自己をコントロールすることがはたして可能なのかという疑問が生じる。介護においては、非従属の「自立」・「自律」を目指しているとは言っても、他者の関与を否定するわけにはいかないのである。つまり、他者があつての「自律」が目指されているのである。

そこで次に、他者があつての「自律」についてマーティン<sup>12)</sup>の議論に目を向けたい。

## 2. 他者の関与による自律

上述したように「自律」とは、自分で決定し、さまざまなことを選ぶ自由を意味しているが、それは勝手気儘な自分勝手な行動とは異なる。自ら定めた基準に従って行動するためには、判断する基準が必要なのである。では、その基準はどのようにつくられるのか。

### 1) 他者の存在による自律

マーティンはその著書『スクールホーム』<sup>13)</sup>の中で、「自律」に必要である判断基準は他者の存在と依存との中で形成されることを述べている。

氏は、人々にとって共通した利益が得られるような意志、一般意志をお互いに確認し合う必要やその一般意志そのものを体現したものが国家であることを説いたルソーの思想を引用しながら、「『ものごとに十分精通する』ことはルソーの望んだ市民の姿であり、また私たち自身も目指しているところである。しかし、そのためには事実や推測、意見、仮説を求めて他者に頼らなければならない。なぜなら普通の人間は、判断しようとするのがらすべてについて十分知るすべを持っていないからである。仮にそのような人間がいるとしても、その知識のほとんどは、そしてそれを見つけたり解釈したりする技術は、家庭や学校で教師や教科書から獲得されたものに違いないのである。自律の判断しようという事柄について全て知っているわけではない。他者の意見など求めることになる。他者があつて自律が成り立つものである」<sup>14)</sup>としている。

つまり、マーティンは、普通の人間は、判断しようとするのがらすべてについて十分知るすべを持っていないから、他者があつてはじめて「自律」が成り立ち、そこには他者の関与が少なからず影響を及ぼしているというのである。

## 2) 依存することの積極的意味

マーティンよれば、「自律」ということは人との関係性の中でこそ成り立つものである。そのための人間関係には対等な関係が必要であり、しかもその関係は、依存している関係であると述べている。氏は、ソクラテスのひとり一人では自給自足出来ず、相互依存性を国家の社会構造の中に組み入れる思想を正しいとし、依存は人間が生きていく中で決して避けられない事実であると次のように述べている。「わたしたちを生み、育て、そして教育してくれた人々に加え、今も私たちの食物を育て加工し、調理し、ベッドを整え、家を掃除し、書類を管理し、オフィスを掃除、車を設計し、道路を作り、遺言書を作成し、薬を処方してくれる人々—このリストに終わりは無いのだが—私たちが依存していることを無視するならば、私たちは関係を持たない人々で構成される幻想の理想国家にしがみつくとことになる。依存をその最も悪質な形態—奴隷制、強制労働、搾取、自己犠牲、そしていうまでもなく独裁—と同一視すると、私たちはその有益な側面を発見しそこなうことになる」<sup>15)</sup>と。それは、他者と結びつくことが自立と背反せず、他者へのケアや関心が自己決定の概念と対立しないことだとしている。

つまり、マーティンが主張するのは、自分たちの存在には、依存という一見すると「自立」とは対極にある事態のように見えるが、実は生きていく上では決して避けられない不可欠のものであるということである。他者と結びつくことは決して「自立」と背反することにはならず、むしろ依存する関係のなかで「自立」がなされていくと氏は考えるのである。

マーティンの議論に加えて、庄司<sup>16)</sup>は「自立」の対象が子ども・障害者・高齢者・女性等のいずれであるかによって、問われる「自立」の内容が異なってくることを指摘している。つまり対象によってそれぞれに即した「自立」の捉え方をしなければならないと言うのである。

高齢者の「自立」については、これまではあまり論じられてこなかったことを庄司は<sup>17)</sup>指摘し、その「自立」にはそれを可能にする諸条件が必要であり、条件の中にケアが含まれることについて論じている。その「自立」の解説の中で、庄司は古川による「自立」に関わる社会福祉分野における主要な2つの言説をとりあげ、「生活保護法が自立・自助という経済的自立を指すのに対して、障害者の自立生活運動における自立は、自らの人生や生活のあり方を自分の責任において決定し、自らが望む生活を選択して生きるという意味での自立がある」と述べている。そして、「これを経済的自立や身辺的自立とは区別される第3の「自立」とし、「自立」(independence)よりも「自律」(autonomy)と表現するほうが適切である」<sup>18)</sup>と言う。

また、庄司は<sup>19)</sup>古川による「自立」に関する中で用いられている「依存的自立」という言葉に注目している。古川は「人が生涯のうち自助的自立を維持する期間は成年期に限られており、他者や社会制度への依存を余儀なくされる幼弱期と高齢期がある以上、自立生活支援もそのような依存的自立の文脈から捉えなければならないとしている」<sup>20)</sup>と述べているが、このことに対して、庄司は依存的という表現に違和感や否定的な意味合いを感じると言い、「依存的自立」については、「自律的自立」という表現が受け容れやすく、近年、一般化した自立支援という表現に代えて、自律支



援を用いることが適切であると述べている<sup>21)</sup>。

しかし、マーティンの言うように依存的関係の中で「自立」が成立するならば、ここで述べている依存的自立は「自律」と等しいということになるであろう。むしろ私たちは、依存的という表現が悪しきことのように捉えることに鋭敏になるべきではないのか。つまり他者に依存することは人間が存在する上で、不可欠のことであり、依存を否定的に捉えることは介護を受けることを否定的に捉えることにつながる危険性を孕んでいるとも言える。

ここまで、「自立」・「自律」について哲学・教育学的観点から見てきた。そこでの議論を簡単にまとめてみると、「自立」・「自律」は、他者の支援の不在を意味するのではなく、自分が何をすべきか、何が自分にとってふさわしいかを、他者から押し付けられない状態である。しかし、他者から押し付けられない状態とは他者の関与を否定し、他者へ依存しないことではない。マーティンが主張するように依存することの積極的意味は、他者の関与があってこそ自分が実現するものに向けて環境や自分をコントロールできることを意味しているのである。つまり「自立」と「自律」にはそれぞれの独自の意味はあるが、それぞれが成り立つための条件には、他者の存在との関係が関与していることを否定できない。個人の「自律」という場合、自分の意思は自分の中で形成されるが、それは完全に他者との関係を断った中での形成ではない。他者との対話を通して自分の気持ちを知り、自分の考えが形成されるということは多くの人が体験を通して知っている事実でもある。このことから筆者は、「自立」・「自律」が成り立つための条件には他者の存在との関係が関与しており、その他者の存在となることが介護に求められる自律支援になると考えるのである。

### Ⅲ. 介護領域における「自立」と「自律」の概念の考察

ここまで、「自立」・「自律」の概念について哲学・教育学的な領域における議論を概観してきた。そこで、次に介護領域における「自立」と「自律」の概念がどのように捉えられてきたのかに目を向けたい。

介護を必要とする多くの高齢者の中には、認知症であるために意思能力の低下や自己決定が困難な状態である者が存在する。そのような状態において、河野が言うような、自分の求めることを実現できるように環境をコントロールする「自立」や、自分の求めるものを実現できるように自己コントロールする「自律」を達成することは可能なのであろうか。この場合、河野の意味する「自立」・「自律」の双方ともに困難な状況となることは否定できない。また、終末期における意思確認、例えば胃ろう造設など延命治療に関する意思確認などの問題について自分で判断・決定することが困難な場合もある。そのような場合は他者に決定を委ねざるをえないことは当然である。

介護を必要とする者にとって、自分らしく生活をする、もしくは人生を全うするには、マーティン

が述べているように、他者の存在や依存関係を抜きにしては達成できない。すなわち、その人の判断や決定を支援する他者の存在が必要なのである。その他者とは、その人と信頼関係を築きながら、意思決定を共有し、もしくはその人の視点に立って考え決断する、つまり他者として、その人の視点に立って「自立」・「自律」を考えられる存在に他ならない。

そこで次に、箕岡が述べる介護における「自立」・「自律」の意味とその支援に注目をしたい。

## 1. 介護における自立・自律

箕岡<sup>22)</sup>は、高齢者ケア、特に介護現場における様々な問題(例えば、認知症の人の徘徊や介護抵抗など)について、介護する者がその問題を介護技術だけでの問題として捉え解決しようとするのではなく、倫理的気づきの視点からその問題の解決にあたることの重要性について述べている。さらに、倫理には正解が一つというわけではなく、よりよく生きるための考え方を提供する学問として位置づけ、その方法論を用いて高齢者の立場に立ってよく考えることが、介護倫理の実践に従うことになるとしている。そして、その実践には、高齢者の尊厳に配慮したケアを行うこと、つまり「自立」を支援し、「自律」を尊重することが大切であると言い、「自立」と「自律」について次のように解説している。

すなわち、「自分のことを自分でできることを「自立」、自分のことは自分で決めることができることを「自律」とした上で、個別性、その人らしさに配慮したケアを行うことが自立支援につながる」<sup>23)</sup>と言うのである。

ここで述べているその人らしさに配慮したケアとは、例えば認知症の人の徘徊行動について、介護する者が認知症である人の視点に立って、彼(彼女)の行動について解釈することや周囲との関係性について注意を向け、その人の意思決定を共有するなどによって「自立」と「自律」に配慮したケアは成り立つと言うのである。

さらに、氏によれば介護における「自立」とは、老化、障害、疾病などによって生活支障を抱えている人が、その生活支障を抱えていることによる心身の不自由を、支援者や社会資源の力を借りながら受け入れ、具体的に生活を組み立てていくプロセスであるというのである。

箕岡の述べる「自立」は、河野の言うような、自分で環境をコントロールする1人称の「自立」とは異なり、他者である支援者や社会資源の力を借りながらの3人称による「自立」であると言えよう。

箕岡は、「介護の実践において「自律」(自分のことは自分で決める)を尊重し、「自立」を支援することが尊厳に配慮することになる。すなわち高齢者を一人の人として尊重し、本人の意見や価値観に耳を傾け、快適な生活が送れるように「自立」を支援することである。意思能力がなく、自分のことが自分でできない人でも同じで、その尊厳に配慮することが大変重要である。かけがえのない個人として尊重され、自由な意思のもとで自己決定ができる、それこそ尊厳が保たれた状態と言える。そのために、介護者が介護知識、技術の研鑽をすることが自立支援につながり、その人の意思に耳を傾ける関わりをすることが「自律」の尊重につながる。結果として尊厳に配慮した介護に

つながっていく」<sup>24)</sup>と述べ、「自律」を支援することが介護には何より重要であるとともに、そのことが個人の尊厳に配慮した介護になると言うのである。

つまり、介護では「自律」・「自立」双方の支援とともに、特に「自律」に重点を置いた支援が求められると言っても過言ではない。上述した箕岡の述べる「自立」の解釈に従えば、介護福祉士の倫理綱領<sup>25)</sup>にも謳われている自立支援は、身体的自立の支援に留まることなく、「自律」することができるよう支援することに他ならないと言えよう。そして、その人自身が望む生活が出来るように環境を整え、生活を組み立てるための過程が自立支援であるならば、その人が望む生活のための判断や決定に寄り添いながら支援する「自律支援」がなされてこそ、はじめて「自立支援」と言えるのである。

### 1) 生きることを支える「自立」

箕岡の述べる「自立」は、老化、疾病などによって生活支障を抱えている人が、その生活支障を抱えていることによる心身の不自由を、支援者や社会資源の力を借りながら受け入れ、具体的に生活を組み立てていくプロセスに他ならない。言うなれば老化、疾病などによって生活支障を抱えている人が、人生の主人公としてその人らしく生活を送るためには、介護を必要とする者が望む生活を他者に理解されることが必要であり、それとともに、介護を必要とする者が望む生活に近づけるように支援する活動として介護がある。その人らしい生活、人生を生きることが「自立」への支援であるならば、支援する側の健康や障害に対する考え方や捉え方がその人の生きることや生活に少なからず良くも悪くも影響を及ぼすことになる。

そこで、自立支援に関わる専門職の共通言語として提起された健康や障害に対する新しい考え方であるICFについて、今一度確認してみることにする。ICFの考え方が採択される以前は、障害を個人の問題とするWHO(世界保健機関)の国際障害分類、ICIDH(International Classification of impairments, Disability and Handicaps)の考え方が広く普及していた。ある病気をすれば必ず機能・形態障害がおこり、そうすれば必ず能力障害をおこし、そのため必ず社会的不利が生じる、という運命論的なものであった。障害の多くは社会環境によって作り出されたものであるという新しい考え方に改められたのが、2001年にWHO(世界保健機関)の総会で採択された国際生活機能分類<sup>26)</sup>ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health)(以降、ICFと記す)である。

ICFは、障害等による活動制限や参加制約となることだけに目を向けるのではなく、疾患と障害を持ちながらも、病気の治療と障害への対応の両者を保障することが必要であること、障害等による活動制限や参加制約となることだけに目を向けるのではなく、生活機能という包括的視点から生活を捉え病気や障害があってもその人らしく生きることが可能であること、支援者や社会資源の力を借りながら生活を組み立てて行くことが可能であることを示している。

また、生活に影響しているのは環境因子(個人に影響を与える因子)と個人因子(個人の人生、



生活の背景)であり、介護者は個人に影響を与える人的環境ともされている。

このように高齢や障害によってできないことに目を向けるのではなく、たとえ障害があっても支援者や社会資源の力を借りながら生活を組み立てて行くこと、生きることを包括的な視点から見ていくことを提起した考えがICFであり、その目指す支援が自立支援であるとされているのである。

したがって、その前提には、必然的にその人が望む生活をその人自身が決定していく「自律」のための支援の必要性が存在する。では、自律支援とは具体的にどのような支援なのか。そこで「自律」を能力という視点から捉え、具体的支援について論じている石川<sup>27)</sup>の議論に目を向けた。

## 2) 能力としての自律概念

石川は自律概念の先行研究の検討を行い、「自律」を能力という視点から再構成している。氏は能力としての「自律」は「行為主体性」「選考形成」「合理性」「表出」の4つの内的要素から成立することを明らかにし、さらに「自律」の外的条件として「環境」をあげている。「社会福祉において自律および自己決定・主体性・個性の尊重に関する議論はすでに多くあるが、自律の能力とは何であり、何が尊重されるべき対象なのか明らかにされてきたとは言えない」<sup>28)</sup>と氏は言う。氏は、「自律」の概念、およびどのようなものを「自律」の能力として捉えてきたのかが明らかにされなければ、その援助を議論することは、土台を欠いた議論となってしまうと言い、「自律」の尊重を議論するためには、まずその基礎として「自律」の概念を明確し、何が尊重されるべき対象なのか、その構成を理論的に検討することが必要であるとして、「自律」の概念を能力という切り口で整理を試みている<sup>29)</sup>。

ここでは、「自律」を能力として特に自己決定概念として位置付けている「表出」という能力に注目したい。

## 3) 表出のための条件

石川は、自分の意思を決定するだけでなく、そこには自分の決定したことを他者に伝えること、自分の意思を表出する能力が必要であることを指摘している。「自律の能力はある種の行為として表出されるときに初めて、他者から推察されうる対象となり、本人が内面でどのように熟慮していたとしても、それが表現されなければ他者には理解し得ない。そのため、行為主体には自身の意思を表出する能力が必要であり、他者の理解を得るためにはコミュニケーションを図り、交渉する能力が必要となってくる」<sup>30)</sup>と氏は言うのである。

表出能力の援助には、利用者が発言できること、欲求を表現できるようにすること、そしてそれを聞きとることが出来る援助が必要である<sup>31)</sup>と石川は指摘する。その表出の援助には、当事者の自ら発する、伝えるなどの表出するための環境を整えることの他に、支援する側にはその表出されたサインを受け止める力も必要であるということである。そして、言語の疎通性やコミュニケーションに

困難がある場合においても、それに対する具体的なサポート・サービスがその人の「自律」を尊重するためには必要な援助であり、それこそが介護に求められる支援であるということに他ならない。

その意味で、介護は人間関係という環境要因に働きかけるとともに、個人が持っている潜在的可能性にも働きかけるということでもある。つまり介護は生き方を指示するものではなく、その人がどのように生きたいのか、理解し寄り添いながら、その人の生活を支援していく実践なのである。このように考えると、介護する者と介護を必要とする者の関係性の中で、介護する者が寄り添う、支援するなどをしていく中で、介護を必要とする者の自己決定のあり方も変わっていくことは必然である。同時に介護する者の健康や障害に対する考え方や捉え方によって介護を必要とする者の「自律」が妨げられるという可能性もある。介護する者は、介護を必要とする人にとって環境要因の一つであり、介護を必要とする者の能力を十分に発揮できるように環境を整え「自立」できるような支援と、その人が自身で決定できる「自律」にむけての支援をしなければならない。

#### Ⅳ. 介護に求められる自律支援

本来、自己決定を意味している「自律」は、自分自身の中で判断・決定していく思考過程に他ならないが、認知機能が低下している認知症の人は、自らの「自律」を他者に依存しなければならない場合が多い。河野の言う「自立」に向けて自分の求めることを実現できるように環境をコントロールすることや、自分の求めるものを実現できるように自己コントロールすることが容易でない場合、「自律」にむけての支援はどのようにあるべきか。また、自発性を有する行為者となり、尊厳をもって扱われるべき独立した人格となるための「自立」・「自律」とは、どのようなことなのか。認知症などの疾患を抱えているために、自分の意思決定や判断することが困難な人にとっての「自立」・「自律」をどのように考えていくべきか。具体的に質の高い介護、自律支援とはどのようなことを指すのであろうか。

ここでは、高齢者介護に求められる自律支援のために必要な5つの視点、すなわち1. ケイパビリティの開発、2. 自己表現の開発、3. 人間理解、4. 対等な関係性の構築、5. 倫理的配慮という視点から考えていきたい。

##### 1. ケイパビリティの開発

介護においては、自己決定できるように環境を整え、例え自己決定が困難でもその人が望むことに少しでも近づけることができるように、その人の視点に立って考え、決定していく自律支援が強く求められることに注意を払わなければならない。つまり高齢者介護における自律支援とは、介護する者の質の高い介護の提供によって、高齢者の生活の質を維持または向上することを目指す支援でなければならない。

河野は、福祉を切り口にして自立支援について次のように定義している。

氏は福祉(welfare)を、人の幸福を増進させる財である福利(well-being)を維持・発展させるための政策や社会制度、あるいはその実行を意味することと解釈し、自立支援を、アマルティア・センの思想であるケイパビリティの開発と重ねる形で論じている<sup>32)</sup>。

一般に、ケイパビリティは、ある人が「どのようなことができるのか」「どのような人になれるのか」達成するための潜在性のことであり、当事者が望む生活の質を達成するための潜在能力を意味する<sup>33)</sup>。アマルティア・センのケイパビリティは、人間がやりたいことをできる最低限の状態が一番必要なものであるという認識のもと、自由や平等を説いた概念である。

センは、こうした認識に基づいて、人間存在の多様性やニーズの多様性を明らかにしながら、障害者と健常者の間の不平等に目を向け、同じ物を与えられても、健常者ならなしうることを障害者は出来ない可能性があるとは指摘している。まずは、身体を動かして移動したり、共同体の社会生活に参加したりすることが可能になるようにするべきだと言うのである。河野はケイパビリティとは、人にとって選択可能な機能の集合であり、機能とは、人がどのようなことができるのか、どのような人になれるのかを意味し人間の生活における活動や状態のことだと述べている<sup>34)</sup>。ある人がどのような機能を発揮できるかは、その人が利用できる選択肢の範囲と密接に関連している。つまり、「自立」に求められるべきなのは、個人としてのニーズを達成するための基本的潜在能力(例えば、身体を動かすことや共同体の社会生活へ参加したりすること等)を実現するための支援であると考えるのである。

これは、ICFでの障害や健康を社会の中で捉える考え方とも共通しており、その考えに立つならば、介護する者は介護を必要とする者を、社会の中で生きている一人の人間として意識し、その潜在能力を引き出す関わりを持つことが自律支援につながっていくこととなる。

## 2. 自己表現の開発

河野は、「どのようなことができるのか」、「どのような人になれるのか」を達成するための潜在能力の開発とともに、それを表現できる自己開発こそが、教育や福祉にとっての課題であることと指摘している。氏はケイパビリティの開発とともに、「当事者が自分の生活の質を高める価値を表明し、周囲がそれを理解する必要があること、当事者の自己表現の開発こそが、教育と福祉にとっての最初の課題であり、最も基礎的なケイパビリティである」<sup>35)</sup>とした上で、「自己表現する能力があれば、他者の支援を介してであれ、選択と自己決定とが可能となる。自己表現することで、公共的な世界に参加することができる。自己表現する能力の開発が自立支援につながる」<sup>36)</sup>と言うのである。しかし、ここではその自己表現をする能力をどのように開発していくのか、また表現されたものを他者がどのように理解していくのかまでは触れてはいない。

河野の自己表現する能力は、石川<sup>37)</sup>の議論と共通している。両者の議論を踏まえるならば介護における自律支援とは、その表現する能力を見出し理解するための具体的な取り組みではない

か。つまり、自己表現に至る選択や自己決定に他者として深く関わるのが介護では強く求められるということに他ならない。

しかし、現実には認知症があり自己で選択、判断や決定することが容易でなくなった場合、介護する者が質問を繰り返し行い、相手が自分で答えを見つけ出すという対話による自己決定は困難である。この場合、つい介護する者が自分の価値判断で選択・決定していること、決定までいかずとも誘導していることも少なからずあることは否定できないのではないのか。それは自律支援の目指すものとはかけ離れて、他者に対する意見の押し付けであり強いては指示となってしまう危険性を含んでいる。

### 3. 人間理解

介護においては当然、個人の尊厳を守る、尊重するということが重要である。そのため「人」を理解して関わるのが前提となる。これについて河野は「自分の意思を表現し、自分で自分のことを決定する権利が尊重されているかぎり、全面的な介助を受けていても人格的には自立可能である」<sup>38)</sup>と述べている。このことは、介護の必要な人が、当然個人の尊厳というものが守られ、人として尊重されるべきであるということを意味している。

では、介護する者が、介護を必要とする人の決定する「自律」の権利を尊重するための姿勢とはどのような関わりなのか。ここで人格的に自立可能とはどのような支援があって成り立つのかを明らかにしておく必要がある。河野によれば、「自立」していることは独立した存在になるということであるが、この場合は、自分で何でも一人できる「自立」とは異なり、他者に依存している状態にあっても意思を持った個人として存在することが人格的に自立可能ということである。個人を理解する関わりと共に、生きることを支援し、周辺環境を整えていくことが生活を支援していくことであり、そのことが介護の目的といわれる自立支援につながっていくのである。

さらに河野は、「自立」は福祉と教育が達成すべき価値であり、人間の権利であり、「自立」が日本国憲法の第13条の「個人の尊重と幸福権」に基づくものか、第25条の「生存権」に基づくものなのか議論はあるが、それが権利であることは疑う余地もないとしている。集団の一員であること、個であることは、どちらも人間にとってかけがえのない、放棄することの出来ない実存の側面であり、このことは、障害の有無、年齢、性別などの違いを超えた人間の特徴であり、人間の根源的なニーズである」<sup>39)</sup>と言う。すなわち人が人として存在することは、生きている限り当然の権利である。

上記のことを踏まえるならば、介護の基本は深い人間理解の上に成り立っていると考えざるをえない。介護において、対象者を理解するとは、「人間とは環境の中で、環境に生かされながら、また環境に働きかけながら、ときには環境を変革しながら、自己の幸福を追求していく存在であるとする」<sup>40)</sup>という、メイヤロフの言葉がそのことを言い当てている。他者である介護を必要とする者に、介護する者はあたかも自分がその人の立場に置かれたときの感情を移入して共感的配慮を持って介護を必要とする者と一緒になって歩んでいかなければならない。



河野が主張する「自立」が権利であるならば、その権利を遂行することが何らかの理由でできない場合、その事実に関心を向け解決に向けての取り組みがなされるべきである。介護を必要とする者が権利を行使するためにどのような支援が必要なのか。介護者はお手伝いではない。例えば、介護する者は認知症のある高齢者を権利の主体として認識しなければならないし、また通常の生活を保障する支援が求められる。そのために介護する者は介護を必要とする者との関係性を築く努力が最大限に求められる。しかも、その関係性は、対等なものでなければならないのである。つまり、「自律」を支援するためには対等な関係性を築くことが必要であるということである。では、対等な関係とはどのようなことを言うのか。

#### 4. 対等な関係性の構築

マーティン<sup>41)</sup>はケアにとって対等な関係性を構築することの重要性について述べている。例えば、自分が石に躓き転倒した時、手を差し伸べてくれた人は、躓いた者がどのような助けを求めているのか、その置かれている状況をよく知る、知ろうとすることが大切だという。そのことを「思慮深く恩着せがましくないケアをするには、それを受ける人の置かれている特殊な状況についてよく知ることが求められる…。」<sup>42)</sup>と述べている。

このことは介護者が介護を必要としている者の状況について十分に知り、一方的な援助ではなく対等な関係性の中で支援がなされることの重要性を示唆している。

さらに、氏は対等な関係を築くには、相手に対して関心を寄せることが必要であり、またただ対象に関心を持つだけではなく、対象に共感する能力が必要であること、耳を傾けること、自分を忘れること、中に入り込むことが必要であると述べている。

すなわち、より良い人間関係の成立には、同じ目線でのコミュニケーション技法の工夫だけでなく相手に対しての関心、相手の要望に誠意をもって傾聴すること、相手を価値ある人間として尊重することが必要なのである。介護する者はより良い人間関係の形成とともに、相手にとって信頼される人になることや、その人の心の中に隠れていた本心、要望に気づくことができなければならない。それには、介護を必要とする者の立場や抱いている感情に気づくこと、その感情を正しく理解すること、そしてあるがままに受け取ること、価値観や生活歴、思想、年齢などの個別性の介護を必要とする者の訴えを先入観や偏見を持たないで受容することが重要であるのである。

#### 5. 倫理的配慮

高齢者にとって、長い人生の最期によりケアを受けるか受けないかは人生を左右するほどの重要な意味を持つが、介護者はそのことを十分に意識して関わりを持つことが求められる。言い換えるならば、介護者には高齢者の生活の意味を深く考え、生命の尊重、個人の尊厳を守る責任感と倫理観が求められるのである。つまり、介護する者は高い倫理性をもち、自ら律しながら高齢者ひとり一人の尊厳を守る支援を心がける態度が必要なのである。



これまで、個人の尊厳に配慮したケアには「自立を支援すること」「自律を尊重すること」が重要と言われてきた。「介護」はその人らしさの実現のために、介護を必要とする者が自分の能力を活用しながら尊厳をもって生きられるように介護する者が支援することであるが、これは介護を必要とする者が、自分らしさの実現の主体者になるということである。その実現にむけては、介護する者が関与することが自律支援となっていくのである。では、高齢者が尊厳をもって生活できるようになるために必要なことは何か。

まず、重要な点の第一は、介護する者が相手を知るためにはその人と関わること、そしてその人に関心をもって接することが必要であるという点である。ノディングスは、「ケアリングはある関係性を表している。その関係では、ケアする人であるAがもうひとりのBをケアし、BがAをケアしていることを認める。ケアするときのAの意識は、①専心没頭 ②動機の転移によって特徴づけられる。BがAのケアを受け容れ、そのことを表す何らかの③反応を示すことを表す」<sup>43)</sup>とケアする人とケアされる人の関係性について述べている。この場合、ケアする人、される人の関係は対等であり、氏の言葉はまさに介護する者の自律を支援するための関係性を表していると言える。介護する者は、介護を必要とする者を社会の中で生きている一人の人間として認めた上で、関わるという意識を持つことが必要である。つまり人格を意識すること、潜在能力を実現することが可能となるような支援を行い、その実現にむけての関わりが求められるということに他ならない。尊厳の保持の観点から言うならば、どのような状態であっても、その人の「自律」を尊重し、潜在能力を引き出し、見守ることを含めた適切な介護をすることが求められているということである。その関係は対等であると同時に依存的関係を否定するものでないことを介護する者は十分認識しなければならない。

また、沖田<sup>44)</sup>の報告には、長期介護における「自律」についての諸問題に関連して、介護する者は一方的な価値観の押しつけをしてはならず、介護を必要とする者の「自律」を妨げることにならないことが肝要であることが示されている。氏は、老年期の加齢に伴う弱さは、他者の援助を受け入れ依存する程度によって、自らの独立や自律性を譲り渡す、あるいは失う経験として意味されるとした上で、その譲り渡される「自律」を介護する者の価値観で決定する危うさについて、「高齢者介護では、衣服の着脱、食事、入浴、排泄、移動に関する基本的日常生活動作から、家事、買物、食事の支度、交通機関の利用、洗濯、服薬管理などに関する生活動作に至るまで、長期にわたって支援を行うものであり、こうした日常生活動作において持続的、慢性的に他者に依存する高齢者の自律性の扱い方が問われ、特に、身体的・認知的限界を生じている高齢者の意思決定は、当事者の最善の利益を考える義務をもつ介護者が向き合わざるをえない重要な倫理の問題となる」<sup>45)</sup>と述べている。氏はその決定に際して、介護者の価値観を優先し、高齢者の価値観、道徳観、人生の目標、動機が無視あるいは無効にされること、その人らしい選択の「自律」が「自律」の定義だけで決定することのリスクについて指摘している。つまり高齢者自身の価値観を理解し、その人の個性的な選択を守る対応が求められるとしている。

介護の自律支援に求められるものはケアリングによる関係性の構築の必要性であり、また人間を

理解する視点である。特に高齢者介護の自律支援には、それまでその人が生きてきた中で培ってきたものや価値観などを理解して関わることが求められる。そして「自律」の尊重のために、相手を独立した人格と認めるとともにその尊厳を守り、自己決定・判断できる能力を引き出すような環境づくりと対等な関係性－これには依存的関係を否定しないことが求められる－をつくることが必要とされるのである。

尊厳を支えるとは、相手に対してどう関わるかという姿勢、態度や倫理としての概念であり、介護実践の方法に置き換えて議論することではない。しかし、介護を必要とする人の日常生活に深く関わる介護においては個々の介護する者の姿勢が「自律」を支援することに直結することは紛れもない事実である。介護する者のひとり一人がもっている生活習慣や文化、価値観が仕事を進める上で、介護を必要とする者に何らかの影響を与えることは言うまでもなく、倫理観や人間性までも関わっているのである。

## V. おわりに－暫定的結論と今後の課題

ここまで哲学・教育学の領域および介護の領域における「自立」と「自律」の概念について整理、分析を試みた。そこで明らかになったことは、「自立」と一見対極に考えられる依存が「自立」の中に存在していること、そして他者との関係の上に「自律」が成立していること、さらには、「自律」あつての「自立」ということであつた。これまで、見てきたように、「自立」「自律」について、それぞれの概念の違いはあるにしても、各々が切り離されて存在するのではなく、「自律」を基盤にして、その目指す方向の結果として「自立」があるのである。

そして、その両者の概念には、依存や他者の関与という、他者との関係と存在が必要不可欠なのである。つまり、「自立」「自律」には、それぞれにおいての概念があつたとしても、他者という共通の部分によって結びつき、重なりながら、人間が生きていくために必要な概念であるということである。

特に意思表示が困難な人と関わる介護では、個々の状況に応じて自己の表出する力を見出し、それに焦点をあてた「自律」に向けての支援が強く求められることは言うまでもない。その意味では「自律」があつて「自立」が成り立つと言えるのである。

哲学・教育学での「自立」「自律」の概念を考察し、介護の領域における「自立」「自律」のついでの分析を試みてきたが、障害や疾病、高齢などにより日常生活に支援を必要とする人にとっての「じりつ」は、他者の支援を得ながら達成されていく「自律」に他ならない。

つまり、何でも一人でできるという意味の「自立」とは異なり、たとえ障害があつたとしても、自分の生活は自分で主体的に決定していくことができるという「自律」を基本にした自立支援が求められていることは明らかである。今後、認知症の介護などで求められる「自立」にむけた支援とは、自分のことは自分できる「自立」、自分のことは自分で決めることができる「自律」のどちらの支援も重要で

あるが、「自立」と「自律」の双方を区分しての支援は困難ということである。すなわち自立支援以上に自律支援がより求められるということである。

また、どのような状態であってもひとりの人間としての尊厳を持ち、自己選択、決定しながら自らの生活を創っていくような支援—自律支援—を専門的に行う職種が介護福祉士であろう。それは、介護を必要としている人の自己実現にむけての支援や生活の質の向上を目指したより積極的なアプローチができる専門職である。

その専門職として、自律支援のための必要な5つの視点(1. ケイパビリティの開発, 2. 自己表現の開発, 3. 人間理解, 4. 対等な関係性の構築, 5. 倫理的配慮)を意識しながら介護を実践していくことこそが自律支援を担う者の専門性につながっていくと考える。

要するに、介護福祉士は、介護を必要とする者に対して社会の中で生きている一人の人間として意識し、その潜在能力を見出す眼差しと関わりを持つことができる者なのである。さらには、その人の自己を表現する能力を見出すと同時に、その表現されたことを理解する力と、介護を必要とする者の自己表現に至る選択や自己決定などにも他者として深く関わり、共に歩んでいく姿勢を持つことが求められる。

さらに、介護を必要とする者をより深く理解するためには、より良い人間関係の成立が必要であろう。介護する者は、相手にとって信頼される人になることや、その人の心の中に隠れていた本心、要望に気づくことやその感情を理解することができるようにならなければならない。すなわち対等な関係性の構築によって、対象をより理解できるのである。

そのうえで、初めて「自律」を支えることができるのである。そして、介護を必要とする人の日常生活に深く関わる介護においては個々の介護職員の姿勢が「自律」を支援することに直結し、介護する者のひとり一人がもっている生活習慣や文化、価値観が、介護を必要とする人に何らかの影響を与えることは必須である。その介護者の倫理観や人間性までもが、自律を支援することに大きく関わり影響を与えている。

このようなことから、専門職としての介護福祉士は、教育による体系的知識・技術を身につけなければならないことはもちろんであるが、その専門性は身体の世話という行為だけではなく、介護を必要とする者自身が望む人生に向けての環境や自己をコントロールするという「自律」の側面での支援をいかに行うかが重要である。つまり、自律支援にむけて介護に求められるものは、人間の尊厳を視野に入れた取り組み、その人自身の人生に共に寄り添う姿勢であり、その人自身が主人公の人生となれるように倫理的な視野のもとに、その人間の理解者となれるような関わりを持つことである。

今後さらに、認知症高齢者の増加に伴い、積極的な意味での依存関係とともに自己選択、決定しながら自らの生活を創っていくという「自律」の支援がより求められていくことは明らかである。介護の専門性については研究者によってさまざまに論じられてはおり、介護福祉士の定義についても社会の動向によって変遷してきている。しかし、「自律」を支援するものとして、介護に携わる者は、

一人の人間の人生の実現に向けて深く関与する存在であることの自覚を持ち、介護を必要とする者が判断・決定が困難な状態の場合、その委ねられる部分について専門的知識と技術をもって支援するという専門性を発揮することの必要を再度確認しなければならない。個人の生きることを支える介護領域では、哲学的・倫理的思考による人間を深く理解することが重要であり、そのための教育もさらに必要と考える。

要するに自律支援にむけて介護に求められるものには、他者から委ねられる意思決定の部分がその人の人生の実現に深く関与していることの認識とともに、それを担うものとして、個人の尊厳を守ることを具体的な支援活動として展開できる力と、その人の人生の実現に向けて寄り添い、個人の潜在能力を引き出し発揮できるように支援することである。ある時点における他者の意思決定に関与する専門職として、その判断基準となる「自律」について、哲学・倫理的な思考を背景に、人間を理解するための視点を持つことが求められるのである。

介護福祉士の倫理綱領は、すべての人々の基本的人権を擁護し、利用者本位の立場から自己決定を最大限尊重し、「自立」に向けた介護福祉サービスを提供していくとした利用者本位、自立支援を掲げている。このように介護の実践において「自律」を支援していくことがより求められている現在、その根拠になる理論的知識や技術の教育の必要性が高まっていると言えるのである。

しかしながら、介護の専門性について、その「知識」や「技術」がいかなるものなのか、そしてそれらを支える倫理的要素とはいかなるものなのかについて、今後更なる吟味と研究を重ねていかなければならないことは確かである。筆者にとって、それは今後の課題として残されていると言わざるを得ない。

〈注〉

- 1) 介護福祉倫理綱領 1995(平成7)年日本介護福祉会<http://www.jaccw.or.jp/about/rinri.php>
- 2) 箕岡真子, 稲葉一人編著, 高齢者ケアにおける介護倫理, 医歯薬出版, 2012年, pp4
- 3) 庄司洋子, 菅沼隆, 河東田博, 河野哲也, 「自立と福祉」制度・臨床への学際的アプローチ, 第1章 自立をめぐる哲学的考察, 現代書館, 2013年, pp.12-32
- 4) 前掲書pp.14
- 5) 前掲書pp.15
- 6) 前掲書pp.14
- 7) 前掲書pp.14
- 8) 前掲書pp.14
- 9) 前掲書pp.15
- 10) 前掲書pp.15
- 11) 前掲書pp.15
- 12) ジェーン・R・マーティン著, 生田久美子監訳・解説, スクールホーム〈ケア〉する学校, 東京大学出版会, 2007年
- 13) 前掲書
- 14) 前掲書pp.224
- 15) 前掲書pp.223
- 16) 庄司洋子, 菅沼隆, 河東田博, 河野哲也, 「自立と福祉」制度・臨床への学際的アプローチ, 第2章 自立とケアの社会学, 現代書館, 2013年, pp.36-59
- 17) 前掲書pp.40
- 18) 前掲書pp.40
- 19) 前掲書pp.42
- 20) 前掲書pp.42
- 21) 前掲書pp.42
- 22) 箕岡真子, 稲葉一人編著, 高齢者ケアにおける介護倫理, 医歯薬出版, 2012年
- 23) 前掲書pp.4
- 24) 前掲書pp.28
- 25) 介護福祉倫理綱領 1995(平成7)年日本介護福祉会<http://www.jaccw.or.jp/about/rinri.php>
- 26) 細田多穂監修, 河元岩男, 坂口勇人, 村田伸編集, 日常生活活動学テキスト, 南江堂, 2014年
- 27) 石川時子, 能力としての自律－社会福祉における自律概念とその尊重の再検討, 社会福祉学, 第50巻第2号, pp.5-16, 2009年
- 28) 前掲書pp.6
- 29) 前掲書pp.11
- 30) 前掲書pp.13
- 31) 前掲書pp.13
- 32) 庄司洋子, 菅沼隆, 河東田博, 河野哲也, 「自立と福祉」制度・臨床への学際的アプローチ, 第1章 自立をめぐる哲学的考察, 現代書館, 2013年, pp.18
- 33) 前掲書pp.18
- 34) 小川仁志, 使える哲学, 中経出版, 2014年



- 35) 庄司洋子, 菅沼隆, 河東田博, 河野哲也, 「自立と福祉」制度・臨床への学際的アプローチ, 第1章 自立をめぐる哲学的考察, 現代書館, 2013年, pp.19
- 36) 前掲書pp.19
- 37) 石川時子, 能力としての自律－社会福祉における自律概念とその尊重の再検討, 社会福祉学, 第50巻第2号, pp.13, 2009年
- 38) 庄司洋子, 菅沼隆, 河東田博, 河野哲也, 「自立と福祉」制度・臨床への学際的アプローチ, 第1章 自立をめぐる哲学的考察, 現代書館, 2013年, pp.19
- 39) 前掲書pp.23
- 40) ミルトン・メイヤロフ著, 田村真, 向野宣之訳, ケアの本質生きることの意味, ゆみる出版, 1987年, pp.161
- 41) ジェーン・R・マーティン著, 生田久美子監訳・解説, スクールホーム〈ケア〉する学校, 東京大学出版会, 2007年,
- 42) 前掲書pp.219
- 43) ネル・ノディングス, 立山善康他訳: ケアリング, 晃洋書房, 2004年, pp.109
- 44) 沖田佳代子, 長期介護における倫理-高齢者の自律性支援をめぐる諸問題, 社会福祉研究, 愛知県立大学文字文化財研究所, 2001年, pp.15-22
- 45) 前掲書pp.18

### 〈引用・参考文献〉

- 石川時子:『能力としての自律－社会福祉における自律概念とその尊重の再検討』社会福祉学, 第50巻第2号, 2009年
- 小川仁志:『使える哲学』中経出版, 2014年
- 沖田佳代子:『長期介護における倫理-高齢者の自律性支援をめぐる諸問題』社会福祉研究, 2001年
- 介護福祉倫理綱領:1995(平成7)年<http://www.jaccw.or.jp/about/rinri.php>
- 庄司洋子, 菅沼隆, 河東田博, 河野哲也:『「自立と福祉」制度・臨床への学際的アプローチ』現代書館, 2013年
- ネル・ノディングス著, 立山善康他訳:『ケアリング』, 晃洋書房, 2004年
- 古川孝順, 依存的自立[http://homepage3.nifty.com/tanemura/re2\\_index/F/furukawa\\_kojun.html](http://homepage3.nifty.com/tanemura/re2_index/F/furukawa_kojun.html)
- 細田多穂監修, 河元岩男, 坂口勇人, 村田伸編集:『日常生活活動学テキスト』南江堂, 2014年
- ジェーン・R・マーティン著, 生田久美子監訳・解説:『スクールホーム―〈ケア〉する学校』東京大学出版会, 2007年
- 箕岡真子, 稲葉一人編著:『高齢者ケアにおける介護倫理』医歯薬出版, 2012年
- ミルトン・メイヤロフ著, 田村真, 向野宣之訳:『ケアの本質生きることの意味』ゆみる出版, 1987年